

[書評] 小林英夫著 『サミュエル・ゴムパーズ』

著者	津田 真澁
雑誌名	関西大学経済論集
巻	20
号	3
ページ	299-306
発行年	1970-09-20
その他のタイトル	[Review] Hideo Kobayashi, Samuel Gompers, 1970
URL	http://hdl.handle.net/10112/15080

書 評

小林 英夫 著『サミュエル・ゴムパーズ』

津 田 真 激

1

この地上に生をうけたひとりの人間が人生観を形成するのは、その人の体験によってである。だが、人生とは体験の連続であるから、すべての体験が人生観の形成につながるわけではない。それらの体験の中でその人の生き方に深く刻印をおすような体験、これを原体験とよぶとすれば、それらの原体験の蓄積こそがその人の人生観を形づくっていくのだと私はおもう。

そう考えてみると、自分が生きていなかった、先人の時代にさかのぼって、その先人の人生を跡づけてみる仕事、すなわち伝記を書くことはいかにも負担が重い。というのは、その人についての断片的な記述の中に、その場のふんい気をかぎわけて、その人の原体験を識別する鋭い感覚が必要であるし、また一つの事実の説明については、どうしてその事実が生まれたかについての諸説、諸解釈を重ねてみた上で、最も適確だとおもわれる説明をひき出してくる、いわゆる史料批判の科学的能力が必要である。この二つを欠いた伝記はおよそ著者や本人の価値尺度で事実をつなぎあわせたいい加減のものになってしまう。その典型は、たとえばM. C. ラドックのハチスン大工組合長について書かれた伝記であって、よくもまあ都合のいいことばかりならべたものだとあきれる以外にない。

小林英夫教授の処女作『サミュエル・ゴムパーズ』はこの意味で真に成功した、まれに見るすぐれた研究書であろう。そればかりではない。四十年間にわたって、アメリカ労働組合運動の生みの親であり、今日にいたるまで最大の指導者であったというべきゴムパーズについて、日本でまともな研究が一つもなかったという、日本の学界のうす寒い現状を小林教授が打破されたことは、学界にとっても画期的な意義がある。まことによるこばしいことである。

この『サミュエル・ゴムパーズ』はもとも関西大学『経済論集』に9回にわたって発

表された長文の研究論文を基礎にしてまとめられたものであるが、この論稿と今回の研究書をくらべると見出しや内容はかなり変っている。これはおそらく論文の発表中に日本読書協会から『サミュエル・ゴンパーズ自伝』が訳出されたことが影響しているであろう。むしろこの変更があったために小林氏独自のゴムパーズ観がはっきりと出ており、しかもそれらは適確であるように思われるので、本書の研究史上の意義をいっそう大きくしていると私はおもふ。

小林氏ははしがきにあたる「プロローグ」の中で「わたくしにとってゴムパーズの魅力はその人間臭であった。酒を愛し、人と語らうことを愛し、適当に正義派で、そして適当にいやな奴であった。音楽を愛し、かのエンリコ・カルーソーと親交があったことなど、わたくしには妬しくもあった。イデオロギーはそれなりに重視するが、結局のところイデオロギーはイデオロギーにすぎないと割り切るところは、人間の正常さをはなはだしく感じさせた。わたくしには、かれの素描を描くことが一種の心の安らぎともなった」(ii ページ)と書いている。この文章をわたくしは美しいと思うし、本書を張りのあるものにする基調になっていると考える。

2

そもそも人類の歴史に残る偉大な人物の生涯をたどってみると、彼の魂を躍動させるような深い原体験の連続である青・少年時代、つちかわれた思想に不断の知識をくわえながら行動する壮年時代、すでに功成り、体力のおとろえとともに現状維持、自己満足ですごしていく老年時代、という三つの時期区分をまぬがれないようにみえる。もとより平凡な人間にもこの時期区分はあてはまる。ただ偉大な人物は行動する舞台も大きいし、また三つの時期のそれぞれが劇的であり、社会を動かすほどのはげしい力をもっているということがちがうのであろう。

サミュエル・ゴムパーズもこの三つの時期をとおって生きていった。本書は六章から成りたっているが、第1章はその青少年時代をえがき、第2, 3, 4章はその壮年時代を、第5, 第6章はその老年時代をえがいているといえる。もとより各章は問題別、時期別という複数尺度で区分されているから時間の経過からいえば多少のオーバー・ラップはある。それぞれの章でどんなことが書かれているのか、少したどってみたいとおもう。

第1章「生い立ち—修業時代—」は1850年にロンドンのスピタルフィールズに生まれたゴンパーズが葉巻工である父や家族とともに13才でニューヨークに移住し、葉巻工として働き、ニューヨークで葉巻工組合支部を結成し、さらに全国組合副組合長となって組合活

動にのり出すまでの時期をあつかっている。

後年の労働組合運動への献身をうみ出したゴムパースの精神は幼年時代の貧乏と屈辱の日々の間に形成された。その数々のエピソードが第1章で印象深くえがかれている。だが、なぜゴムパースにとって労働運動が選択の道としてえらばれたのだろうか。同じような生活を幼年時代にたどりながら、コモンズは学者になり、エジソンは発明家になり、クライスラーは自動車企業家となったではないか。本書はそれを亡命社会主義者との接触とそれに触発された勉学、8時間運動(1871年)、労働者パレードの弾圧(1874年)などが彼自身の原体験になったことを明らかにしている。

友愛運動から労働組合運動へ回心したゴムパースは整然としたタテ系列の組織と能率的運営を目的とする、いわゆるビジネス原則にのって葉巻工組合ニューヨーク支部を結成し支部長となった(1875年)。70年代後半の不況、失業、労働問題を無視する市当局、その中でゴムパースはストライキを指導し、団体交渉を定着させようとし、組合管理の工場を運営しようとする。すべては挫折し、ゴムパース一家もまた失業者群の中に投げられた。その中でゴムパースは支部代表として全国組合大会に派遣され、トレード・ユニオンズによる組合理論の大規模な実践にのり出していく。

第2章「検舞台への登場」はアメリカの最初かつ最大の労働組合組織であるAFL(アメリカ労働総同盟と一般に訳されている)の結成と組織定着をめぐるゴムパースの活動をえがき出す。その出発は小さなクラブにあった。「このクラブのメンバーたちは……労働運動そのものを特定のイデオロギイや改革の夢から守り、それを一層鞏固なものに発展させることに腐心していたのである」(41ページ)。いわゆる誓約集団の形成である。私なら、この集団の事情をしこく分析するところだが、それはともかくこの集団を醗酵母として全国連合体結成のよびかけがなされ、「合衆国・カナダ組織職業労働組合総同盟」という、名前は立派だが小さな連合体がうまれる(1881年)。

新しい連合体にとっての試練は労働騎士団との対決である。労働騎士団はアナキスト系の自営業主義をとる当時の大組織であり、ゴムパースはこの労働騎士団と連合体レベルでも葉巻工組合レベルでも覇権を争わねばならなかった。その勝利の道程の間でAFLが結成され(1886年)、AFLの指導下での8時間労働要求の統一行動が実施され、ゴムパースの開拓者としての仕事が終る。時にゴムパースは36才のAFL会長であった。

「労働運動は現実的な言葉で語られるけれども、その究極の目標は『正義』であって、基本的には精神的なものである」(67ページ)とゴムパースは考えた。そこで彼は組合運動に献身する人々を求めて講演旅行をくり返し、同志を集めていく。

うまれたばかりのAFLには、アメリカの労働史に残るような大きな事件がおそいかかる。ホームステッドの鉄鋼スト（1892年）、プルマン・ストライキ（1894年）がこれであり、ゴンパーズは援助の手のさしのべがおくられて批判をあげる。さらに西部の社会主義組合指導者の反乱がおきてゴンパーズは始めて会長選挙で落選し（1894年）、翌年返り咲くが僅少差にすぎず、ゴンパーズは「組合づくりに献身するどころか、社会主義政党のために組合を利用しかねない多くの社会主義者たち」を忌み嫌い、かれらと「ときとして、いささか冷静さと客観さを欠いていた」（76ページ）ほど激しくたたかう。

3

第3章「一進一退」はAFL会長としてのゴンパーズの40才台および50才台はじめの活動を伝える。タイトルは「一進一退」とされているが、「進」がなにをあらわし、「退」がなになのか読者はちよっととまどうかもしれない。

冒頭で小林氏はゴンパーズの経済哲学を明らかにし、「ゴムパーズは賃金基金説を正し批く判し、需要供給の法則の意味を正しく理解し、また資本の集中集積の傾向を事実として理解していた」（96ページ）と結論する。しかし「抽象的な法則の認識をはなれて現実の認識と実際の政策ということになると、ゴムパーズは甘かった（ないしは盲目であった）というほかはない」（同上ページ）。その明らかなあらわれは企業合同についての樂觀論であり、企業合同を経済の法則と必要性の単なる発展の所産と考え、企業合同の強力さに対する労働組合の無力ぶりを訴える数百通の手紙にも耳をかさなかった。

このような現実の認識から、ゴンパーズはNCF（全国市民連盟）に参加していく。NCFは「全国的な産業政策の展開を唱える」（105ページ）労使団体であり、ゴンパーズは労働組合を合法的な国民的集団としてアメリカ社会に認めさせるためにNCFを利用しようとしたという。しかし小林氏は現実認識の甘さから「労働指導者としての協力可能範囲を少々越えすぎた」（116ページ）という。たしかに、1901年のU・S・スチールにNCF副会長のゴンパーズが組合指導者としてとった態度は責めきれぬものがある。しかしその後の炭鉱スト（1902年）、溶鉱炉スト（1903年）、地下鉄スト（1905年）では労使協調が徹底しすぎて組合は敗北したり崩壊してしまった。

小林氏はこの章でゴンパーズの移民制限思想をあつかっている。彼自身が移民の子であるゴンパーズが皮肉にも自分をもっとも代表的なアメリカ人だと考えて、精神的な移民制限運動を展開したという叙述が印象的である。

さて、直接行動や暴力をアメリカの精神的風土に結びつける見方はアメリカで普通のこ

とであり、ゴムパースもそう考えたが、ゴムパースは労働運動の発展のためには直接行動はおさえねばならないと考えていた。ゴムパースは過去にヘイマーケット事件（1886年）がアナキストのしわざだとされて死刑が宣言されたとき、たとえ暴力が理由にあげられても事件は労働運動全体への挑戦であるとして減刑嘆願運動を展開した。

同じような事件がこの時期に二つおこった。一つはコロラドの労働者の前知事爆弾殺害事件（1905年）であり、一つはロサンゼルスで金属労働者の新聞社爆破事件である。前者ではゴムパースは非難の中でも行動をおこさず、後者では行動をおこして無実を訴えたところ被告が自白して裏切られた。

さて第4章「苦難の前進」はゴムパースの50才台後半から60才台前半、すなわち第一次大戦前夜の労働運動が舞台になっている。その大きなテーマは二つある。その一つは労働差止命令（インジャンクション）をめぐる法廷闘争である。小林氏は数多いインジャンクションの中でゴムパースに最大の苦難をあたえたバック・ストーブ・レンジ会社事件だけをとくにとりあげてくわしくえがいている（138～158ページ）。第一次大戦前の10年間のアメリカでは労使が力によってはげしく対決した最初の時期にあたる。企業家は自己の企業のオープン・ショップ化を実力でくわだて、企業家団体も総力をあげて応援した。労働組合もまた長期かつ大規模なストライキでこれに応じた。バック社の社長はメーカーの企業家団体であるNAMの会長でもあり、労働条件の切り下げとオープンショップ制で組合に挑戦し、1906年にストライキが発生した。AFLはこのストライキを支持し、その機関紙にバック社製品のボイコットを発表した。法廷闘争は会社がこのボイコット差止命令を裁判所に申請したことからはじまり、7年間もの間、係争がつづいた。地方裁判事は組合に偏見をもち、ゴムパースたちを「暴徒」あつかいにして体刑判決をくだした。ゴムパースはこの判決に落涙しつつ噴激し、社会主義者の激励に感激し、法廷への不服従を宣言したのであった。この事件はゴムパースのアメリカへの信頼をその生涯で唯一回ゆるがせた事件だといわれている。

この章のもう一つのテーマはゴムパースの無党派政治活動についてである。無党派政治活動の思想と初期の展開はすでに第3章でとりあげられているのだが、それが現実的になるのは第4章の時期になってのことである。AFLの無党派的政治活動とは「(一)既成政党の候補者指名と立法方針の作製、(二)選挙、(三)特定立法の議会通過、(四)行政過程への四つの局面への圧力行使である」（152ページ）。

企業家のオープンショップ活動が奔放に荒れくるい、法廷判決がつぎつぎに反組合的で組合運動が厚い壁にぶつかっていたとき、イギリスでは労働党が生まれていた。これに刺

激されて、AFLは「労働苦情宣言」を採択し、「政治活動計画」を発表して民主党支持活動にのり出し、ついに1914年にクレイトン法を成立させることに成功した。しかしゴンパーズの無党派的圧力方式の政治活動は労働者政党を生み出さず、現在にいたるまでこの原理はアメリカ労働運動に一貫してつらぬかれている。

4

第5章『戦争—理想と現実—』は第一次大戦についてとったゴンパーズの態度と戦中戦後の活動を伝え、時代は第6章とオーバーラップする。小林氏は愛國的ナショナリストとして政府機関の委員となって戦時協力を熱中したゴンパーズ、そして国際的な労働者の結合を嫌悪したゴンパーズをえがき出す。戦時協力を理由とするゴンパーズの譲歩は相当なものだったことが本書で明らかにされる。さらに大戦後の国際労働機関の設立に関してもゴンパーズは「合衆国のような一部の国のすぐれた労働基準を平均的な国際水準にひきあげる恐れがある」(200ページ)としてヨーロッパ案と対立した。

平和会議を終って帰国したゴンパーズは事故で失明した。アメリカ国内でゴンパーズは「権威と名声の頂点にあり」「相当の富を蓄積した」。「短軀と見ばえのせぬ風ぼうの故に潜在化していたかれの劣等感」は失明のために深まり、それが逆にかれの不自然な誇示欲となって現われた」(202ページ)。ゴンパーズは年老いて闘争の生涯に疲れ、戦時の国民的指導者としての栄光の自己満足に耽った」(203ページ)。

最後の第6章「老人の苦悩と自己満足」は大戦後から1924年の死にいたるまでのゴンパーズの足跡を伝える。AFLの戦時協力によって多少なりとも進んだ労働者保護や労使関係の改善は政府および資本の反労働攻勢のもとでいっきよに無に帰していった。いわゆるアメリカン・プランの時代の到来である。その代表例は1919年の鉄鋼スト、炭鉱ストであって、とくに鉄鋼ストでは鉄鋼資本が「ありとあらゆる組合撲滅戦術を使うという激烈なもの」(219ページ)であった。ウイルソン大統領のもとで組織され、労使関係を処理するはずの労・使・政府の三者構成の産業会議は「使用者側の高圧的な態度」(223ページ)で解体し、労使協調は一時の夢に終わった。裁判所の争議差止命令はクレイトン法のもとで復活し隆盛をきわめ、「AFLは反動的な時代の流れに押されていた感がある」(231ページ)と小林氏は書いている。

第一次大戦後にゴンパーズはラテン・アメリカ諸国とAFLモデルによって連携する汎米労働総同盟の建設に成功した。その連携は主としてメキシコとの間であったが、その第四回会議出席の帰路で息をひきとった。74才であった。このことを叙述し最終章を終った

小林氏はその後のアメリカの労働運動に生きつづけたゴンパースの思想を「エピローグ」で語って本書を完成している。

5

本書の内容をわづかな紙数で紹介するのは容易ではない。小林氏は以上の要約の10倍以上の内容を、この文章とはくらべものにならない流麗な文章で書きつづっている。それはこの偉大な人物の生涯についての叙事詩というべきだろうか。

かなり前に京都大学岸本英太郎教授にお目にかかったさい、岸本教授は小林教授のことにふれて、コモンズの『労働史』全巻をほとんど逐語訳でノートをとって勉強しているものすごい学生がいますよ、と私の不勉強をさすように話されたことがある。数年前から小林教授と私は折にふれ文通するようになったが、実は小林教授とは一度もおあいしたことがない。だが、そのはげしい勉強ぶりは本書の中のおびただしい文献の相互照合として、「注」の中にあらわれているようにおもえる。

最後に、私の貧しい研究と本書の間の若干の問題点を書いておく。まず、「二重組合運動との対決」（84～91ページ）でアメリカ鉄道労働組合についてゴンパースの二重組合反対の思想を記述しているが、これはゴンパースの思想を解いたものではないとおもう。ゴンパースの思想は同一職種の二重組織に反対したものであり、その帰結は大規模組合の過度の支持となった。ビジネス原則はここで腐敗とつながりやすいのであって、ゴンパースが大工組合の組織拡大の援助のために悪名高いブリンデル（232ページ）と接触したことはよく知られている。この点でのゴンパースの思想をもっと解明すべきである。

また、1900年代以降のアメリカ労働運動史は労使の実力の対決とよぶのにふさわしい事実が豊富であり、とくに1900年代および1920年代はこの性格がいちじるしい。その性格を「一進一退」（第3章）、「苦難の前進」（第4章）という標題で表現するのは、たとえそれらがゴンパースにとってであれ、適当だろうか。さらに、先述のバック・ストーブ・レンジ会社事件（138～151ページ）をもって1900年代の差止命令を通ずる組合の苦難を代表させているが、これもいささか意外である。たしかにゴンパースにとってこの事件は生涯で最大の苦難の体験であった。しかし、運動史としては、ダンベリー製帽工事件の方が転換点として大きいと思うので、この事件についてのゴンパースのかまえ方を知りたいとおもう。

本書の書き方について感想をのべると、「エピローグ」で小林氏が書いているように背景に力がいっているのはすばらしいが、そのためにゴンパースの人物像が時にうすれ

る。これはともかくつぎつぎに大きな事件がおきすぎてとても本書の大きさでは盛りきれないからだろう。ゴンパーズと周辺の人物との関係も書き足りない印象がある。

小林氏がことわっているように本書の材料は他人が書いた「自伝」や伝記および後代の研究文献から成りたっている。そのことを批判する気もちはない。私もアメリカに住むまでは原史料にほとんどふれる機会がなかったからである。いま小林氏は労働史の史料のメッカであるウイスコンシン大学で研究をはじめられた。かつてはじめて豊富な原史料を眼前にして心おどった私の感激を小林氏もいま味わっておられることだろう。帰国後の研究発表を読者とともにたのしみに待ちたいとおもう。

(ミネルヴァ書房, 1970年8月刊, B6判, VIII+248+6 ページ, 780円)